

すべての仲間と共に「福島県沖地震」震災復旧と

22春闘をたたかい抜く中央執行委員会「声明」

3月16日23時36分、福島県沖を震源とした大規模な地震が発生した。昨年2月の地震に続き、東日本大震災から11年を経てもなお、3月11日を彷彿させるものであった。

あらためて被災された皆さまに対してお見舞い申し上げます。そして、組合員や社員のみならず、関係者の皆さんが、震災復旧と代行輸送にご尽力頂いていることに感謝申し上げます。

賃金引き上げ第3回交渉は、前夜に地震が発生したこともあり、団体交渉の開催が危ぶまれた。結果的に団体交渉は開催されたが、団体交渉冒頭の席で、会社は「現在復旧作業やお客さまのご案内をおこなっている社員の皆さんへ感謝申し上げます。社員一丸で復旧にあたっていく必要がある」と述べた。JR東労組からも「早期の復旧、さらなる安全第一、安定した鉄道の輸送に全力で取り組んでいく」と述べ、労使が互いに尽力することを共通認識とした。現在、職場におけるたたかいの中で組合員との対話や意見集約を通じて、団結力や組織力が高まっている。同時に震災復旧に向けて、私たちがおかれている現実を理解することも重要だ。

中央本部は、18日現地に赴き、仙台地本の仲間の皆さんと震災の現状と復旧状況、様々な課題を意見交換で伺った。地震について、「11年前より揺れた。地鳴りがこれまでと違った」「昨年地震で修繕した家屋がまた破損した」「もう少し揺れが長かったら3・11と同じだったかもしれない」「新幹線はこれまで震災を教訓にした安全対策があったから、あの被害で済んだのではないか。不幸中の幸いだ」という意見を伺い、地震の凄まじさや被災エリアの現実を実感した。同時に、脱線した新幹線からの避難誘導を秋田・仙台地方本部の組合員が担った報告を受け、頭が下がる思いである。

一方、職場からは「受信料を理由にテレビが撤去され、情報収集ができない」「タブレット頼りの業務なので停電が発生すると何も情報を得られなくなる。予備電源の確保が重要だ」「遠距離通勤対策は、柔軟に対応できないのか。現場での判断力も重要だ」など、コストカットや働き方の環境変化に基づく具体的な意見が出された。中央本部は、各地方本部と連携を取り、課題解決に向けて努力するものである。

また、バス東北の仲間からも「皆大変だがこういう時だからこそ協力していく、『言う時は言う、やる時はやる』この頑張りや春闘や期末手当につなげたい」と決意が述べられた。グループ各社で働く組合員が、大変な環境の中で奮闘している事を忘れてはならない。

いま22春闘と同時に福島県沖地震からの震災復旧と代行輸送、年度末決算など課題が山積している。特に新幹線復旧については、「困難を極める」とも言われているが、一方で組合員自身も被災しており、家族を含めた不安解消と生活の再建が急務である。

JR東労組はこの様な時だからこそ、「抵抗とヒューマニズム」の精神で直面する2つの課題を乗り越えていく。1つ目は、22春闘に向けて。引き続き職場でのたたかいを強化し、会社回答における狙いについて議論を深め、組織強化・拡大を実現しよう。2つ目は、鉄道の復旧に向けて。余震にも警戒しながら「安全・健康・ゆとり」を基礎に組合員一人ひとりができることを実践しよう。

あらためて、福島県沖地震で被災され、亡くなられた皆さまに哀悼の意を捧げます。

私たちは、22春闘のみならず、震災復旧に向けて奮闘する決意であることを述べ、声明とする。

2022年3月19日
東日本旅客鉄道労働組合
中央執行委員会